

報告

アク・ベシム遺跡AKB-21区d出土の線刻画瓦について

—帝京大学文化財研究所2025年春の調査から—

望月 秀和^{*}・山内 和也^{*}^{*} 帝京大学文化財研究所

要旨

アク・ベシム遺跡・大雲寺址の発掘調査において、線刻画の施された瓦が出土した。大雲寺とは、武則天が仏教による国政安定を目的として全国に建立させた寺院である。線刻画が施された瓦はすべて、唐が撤退した後に造られた瓦と推定している。しかしその線刻画の中には唐代の画風が残るものがあり、現地に唐代の文化的要素が根付いていたことを示す貴重な知見となった。

キーワード：アク・ベシム遺跡、唐代、線刻画、画風、武則天、大雲寺、碎葉鎮

はじめに

帝京大学シルクロード学術調査団は、2016年以来、キルギス国立科学アカデミーと共同で、キルギス共和国北部に位置するアク・ベシム遺跡の発掘調査を行なっている。

アク・ベシム遺跡は、かつてスイヤブと呼ばれた都市で、漢語史料では碎葉、素葉としても知られている。同調査団のこれまでの発掘調査によって、アク・ベシム遺跡の第2シャフリスタンこそが唐軍が建設した碎葉鎮城であることが判明している。その碎葉鎮に関して、タラス戦に従軍した杜環による『経行記』の逸文に、「昔交河公主所居止之處、建大雲寺、猶存」とあり、ここにも則天武后が設置した官寺である大雲寺が置かれていたことが知られていた。大雲寺とは、武則天が仏教による国政安定を目的として全国に建立させた寺院である。この大雲寺の位置についてはこれまで不明であったが、同調査団はかつてA. N. ベルンシュタムが調査した第0仏教寺院が「大雲寺」とであると推定し、2024年度よりキルギス国立科学アカデミー及び龍谷大学と共同で同地点（AKB-21区）での発掘調査を開始し、2025年度には伽藍の中央にあたる建物基壇を対象に発掘調査を

実施した（図1）。

調査の結果、金堂と推定される建物の基壇の北側（AKB-21区d）において、塼列や階段と推定され

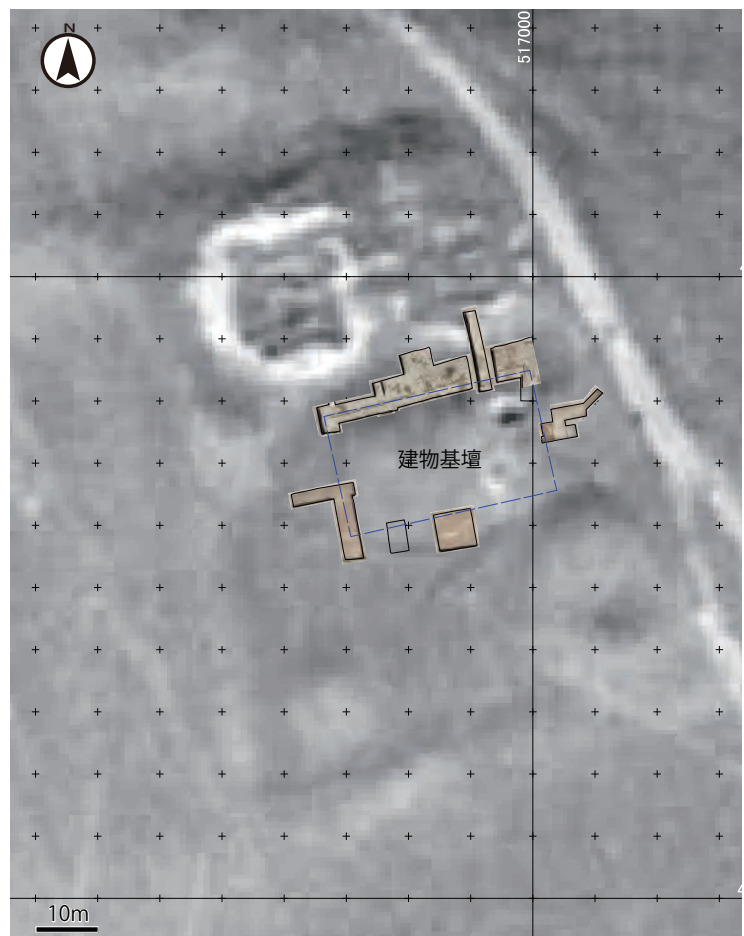


図1 AKB-21区d調査区配置図

る地覆石を検出するとともに、基壇周辺では大量の瓦が堆積する状況を確認した。この瓦の堆積のなかには、石仏片、塑像片、装飾に用いられたと推定される金箔等などの仏寺に関連する遺物も混在していた。中でもソグド語の文字瓦とともに注目されたのが、建物基壇の周囲から出土した線刻画が施された瓦の発見である。線刻画は、焼成前に描かれたもので、瓦製作当時の様相を窺い知る貴重な資料である。本稿では発見した主な線刻画瓦11点について報告する。他の資料等の詳細については、今後刊行予定の報告書をご覧いただきたい。

1. 線刻画瓦の特徴

推定・大雲寺址では、還元焼成による青灰色の瓦と、酸化焼成により土器や土管に類似する橙色をした瓦（「赤瓦」と称す）の2種類が混在して出土している。この2種類の瓦は、色のみならず、製作技法、形態も大きく異なっている。詳細については今後の調査と検討が必要であるが、現時点では、灰色の瓦は「大雲寺」の創建時（692年頃か）に焼かれて屋根に葺かれたものであり、いわゆる「赤瓦」はそれ以降に屋根の修理のために焼かれたものであると考えられる。つまり、「大雲寺」は比較的長い期間にわたって仏寺として機能しており、仏寺は地元の人々によって維持、管理されていたと推測される。本調査で出土した線刻画瓦は全て赤瓦の破片であったことから、線刻画が施された瓦は、大雲寺の創建等当初のものではなく、唐軍の撤退以後に焼かれたものと考えられる。なお、碎葉鎮城の中枢部に当たるAKB-15区では大量の青灰色の瓦片が出土しているが、文字が刻まれた瓦が2点確認されているのみであり、線刻画が施された瓦片は見つかっていない。

いずれの資料であっても、基本的に凸面に線刻が描かれており、実際に屋根に葺かれた際には下面となることから、装飾のために描かれたものとは考えられない。いずれの例もおそらく「落書き」であり、大雲寺の近隣に位置していたものと考えられる瓦窯で瓦が製作されていた際、焼成前に瓦が乾かないうちに描かれたものであろう。

発掘調査で出土した赤瓦はすべて破片であることから、線刻画の一部しか残っていないため、各資料のモチーフの把握は推定の域を出ないところがあるが、現時点でのモチーフの区分および線刻の種類は

次の通りである。

線刻画モチーフ

- I：人物（顔） [資料1～3]
- II：道具（楽器か） [資料4]
- III：背景的表现（模様・装飾部分） [資料5・6]
- IV：線・円の組み合わせ模様 [資料7～11]

線種

a：細いヘラ状の工具で瓦表面を撫で付けるように描いた暗文状の線。なお、資料1については、工具を用いたものではなく、指で直接描いたものである可能性が高い。

b：先端の尖った道具で刻みつけるように描いた線

c：aとbの両方を併用しているもの

各資料については通常光写真、実測図及び拓本を掲載し、線種a・cに区分される資料については通常光写真に加えて赤外線撮影した写真を掲載する（図2～7）。また本稿では掲載していない線刻画となるか判別のつかない1本線のみの資料などについては、今後の報告書の刊行を待たれたい。

2. 出土した線刻画瓦

本稿では各資料について、出土地、線刻画のモチーフ、瓦に対するモチーフの方向性¹⁾について記しておく。なお、各資料名とともに、前項で示したモチーフの区分、線種、出土位置、Context番号を〔I～IV-a～c-（出土位置）/CO〕のかたちで示した。補図と合わせて参照されたい。

資料1〔I-a-EA1 PL.1n / C89〕（図2～5）

建物基壇北側の瓦堆積層より出土した。

瓦の凸面には人物（女性）の顔が描かれている。破片のため鼻より上部は欠損しているが、丸みを帯びた輪郭線で顔の下半分が描かれている。頬の位置に見られる点や線状の線刻、及び右側に見られる花は化粧を表現したものであると考えられ、絵画であれば赤色で着色されるべきものと思われる。モチーフは横位でいわゆる「落書き」ではあるが、他の線刻画に比べて緻密かつ迷いのない線で描かれていることから、描きなれた画工のような人物が描いたものではないかと推測される。また顔の表現は正倉院

I：人物（顔）



資料1 [I-a-EA1 PL.1n / C89]



同左赤外線撮影



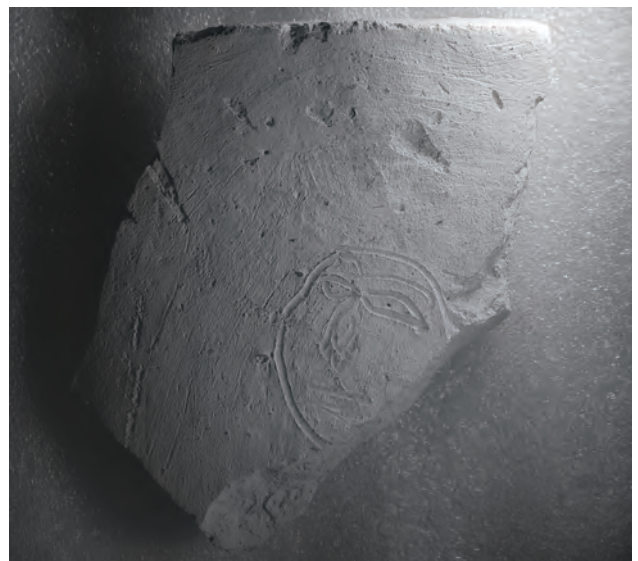
資料2 [I-a-EA1 PL.1n / C94]



同左赤外線撮影

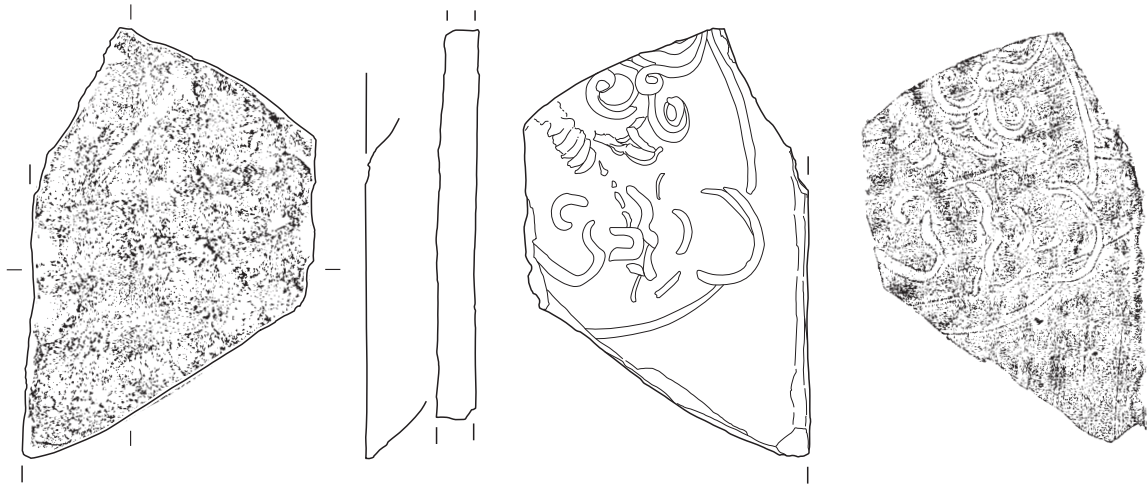


資料3 [I-a-EA1 PL.1n / C97]



同左赤外線撮影

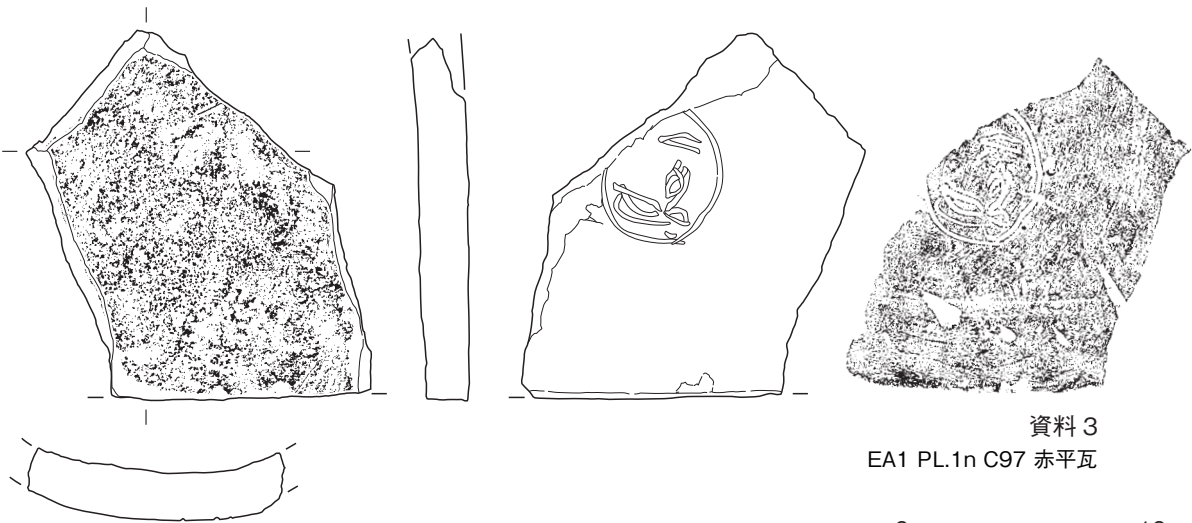
図2 資料1～3写真



資料1
EA1 PL.1n C89 赤平瓦



資料2
EA1 PL.1n C94 赤平瓦



資料3
EA1 PL.1n C97 赤平瓦



図3 資料1～3実測図

実測図



拓本



線刻画の推定位置
赤平瓦完形資料より推定



(髷が高い場合)



(髷が低い場合)

0 (1:3) 10cm

図4 資料1 実測図・拓本・線刻画の推定位置図

髻が高い場合



(化粧なし)



(化粧あり)

髻が低い場合



(化粧なし)



(化粧あり)

0 (1:3) 10cm

図5 資料1 想像復元図

宝物「鳥毛立女屏風」の例に見られる唐風の女性の顔に類似していることも大きな特徴である。この線刻画を描いた人物がどのような人物であったかは不明であるが、唐の画風を継いだ、あるいは唐の画風を熟知した人物によって描かれたものと考えられる。

図4には実測図・拓本と線刻画の推定位置図、図5に2種類の想像復元図（いずれも化粧ありと化粧なし）を掲載した。2種類の想像復元図は「髻が高い」場合と「髻が低い」場合のものである。一般的には「髻が高い」髪型が想定されるものの、その場合、キャンバスとなる平瓦の凸面（約37×24cm）からはみ出してしまうため、「髻が低い」髪型のものもあわせて提示してある（図4）。同瓦片の残りの破片が見つかる可能性もあることから、ここでは、想像復元図として提示した。

資料2〔I-a-EA1 PL.1n / C94〕（図2・3）

建物基壇北側、階段西側の瓦堆積層より出土した。人物（顔）の頭、耳、口（髭）、そして後頭部には螺旋状の線が描かれている。左向きの人物の横顔を描いたものと思われるが、後頭部の髪の毛状の紋様や背後（右側）の文様については不明である。

モチーフは横位で、その位置から平たく置かれた状態で描かれた可能性がある。

資料3〔I-a-EA1 PL.1n / C97〕（図2・3）

建物基壇北側より出土した。人物の顔が描かれていたもので、楕円形の輪郭に目、鼻、口の表現がみられる。鼻、口の書き方が稚拙であり、簡便に描かれている。

モチーフは正位で、平たくおいた状態もしくは立てかけて乾燥している時に描かれたものと推定される。他2点の人物画と異なり、若干強めのなで付けラインで描かれている。なお、筆圧も強めで、暗文的な線ではなく、線刻の線に近い。

資料4〔II-c-EA1 PL.1n / C91〕（図6～9）

建物基壇北側より出土した。モチーフの上下と右側（または左側）が欠損し、上下左右は不明。ここでは瓦の正位方向でみた構図で示すが、左側に撓ったような2条の曲線に格子状の紋様がついたものがあり、右側には弦のような数条の直線と、右側に撓ったような線画2条ほど描かれている。また右から伸

びる横向きのU字状の線は指を示している可能性が考えられる。見つかった当初は、弓を描いたものではないかという意見もあったが、おそらくハープ（竖琴）などの弦楽器を奏でる様子を描いたモチーフの一部と推定される（図8）。

なお、描いた線は暗文状のもの(a)と線刻で深めに刻んだ線(b)が認められる（図9）。bの後にaをひいた部分が大半で、aが加飾または装飾的な線として描かれたことも考えられる。

資料5〔III-a-EA1 PL.1n / C106〕（図6・7）

建物基壇北側の瓦堆積層より出土した。人物画と同じく暗文状の線で描かれているが、小片のためモチーフやその方向性は不明である。曲線が複数条描かれており、主たる部位とは異なる背景的な模様と考えておく。

資料6〔III-a-EA1 PL.1n / C106〕（図6・7）

建物基壇北側の瓦堆積層より出土した。資料5同様、暗文状の線で複数の曲線が描かれており、その間隔もやや密になっている。モチーフは不明であるが、瓦は写真のように横位に置かれ、暗文状の線が上方から下方に弧線が描かれている。

資料7〔IV-c-EA1 PL.1n / C46〕（図10・11）

建物基壇東辺を検出したTr.1/2025より出土した。モチーフとその方向性は不明であるが、直線と不整円形で描かれた模様となっており、暗文状の線と先端の尖った道具によって描かれている。

資料8〔IV-b-Tr.01 PL.1w / C46〕（図10・11）

建物基壇西辺を確認したTr.1/2025より出土した。モチーフとその方向性は不明であるが、残存部では2条の直線の間の不整円形が5つ、写真左側に曲線と直線が描かれている。資料7との類似する直線と不整円形の組み合わせ模様で、曲線も数条含まれている。

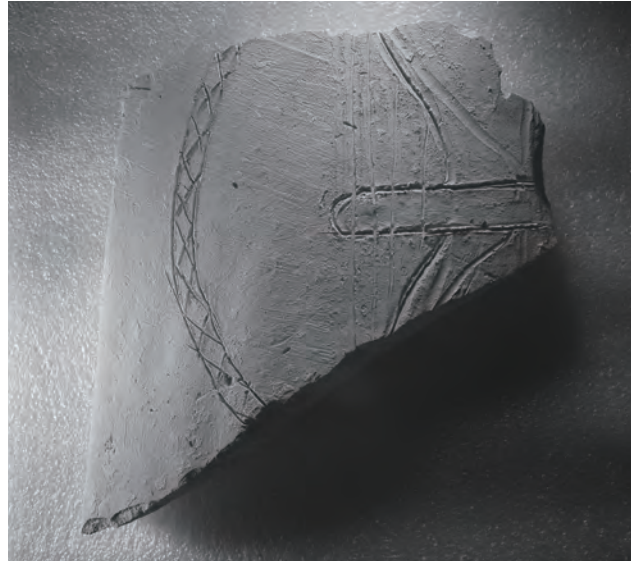
資料9〔IV-b-EA2 PL.1n / C109〕（図10・11）

建物基壇北側の瓦堆積層より出土した。小片でモチーフとその方向性は不明であるが、花卉のような表現がみられる。線刻は先端が尖った道具で描いている。

Ⅱ：道具（楽器など）



資料4〔Ⅱ-c-EA1 PL.1n / C91〕

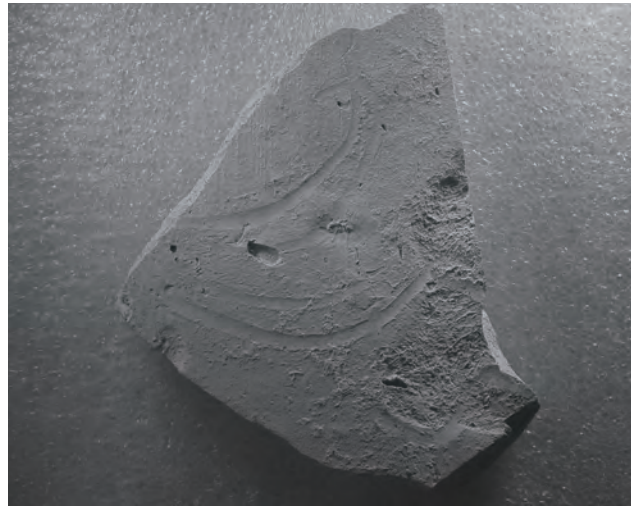


同左赤外線撮影

Ⅲ：背景的表现（模様・装飾部等）



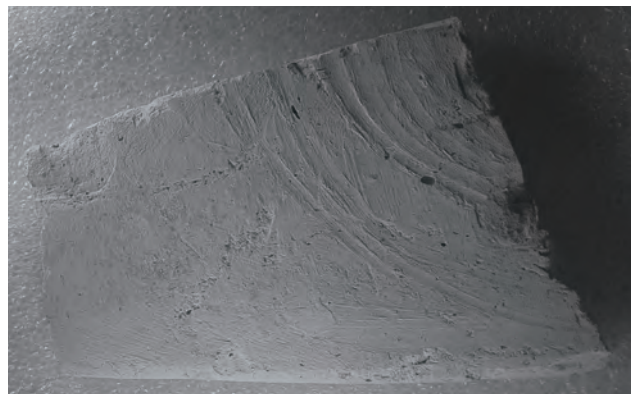
資料5〔Ⅲ-a-EA1 PL.1n / C106〕



同左赤外線撮影

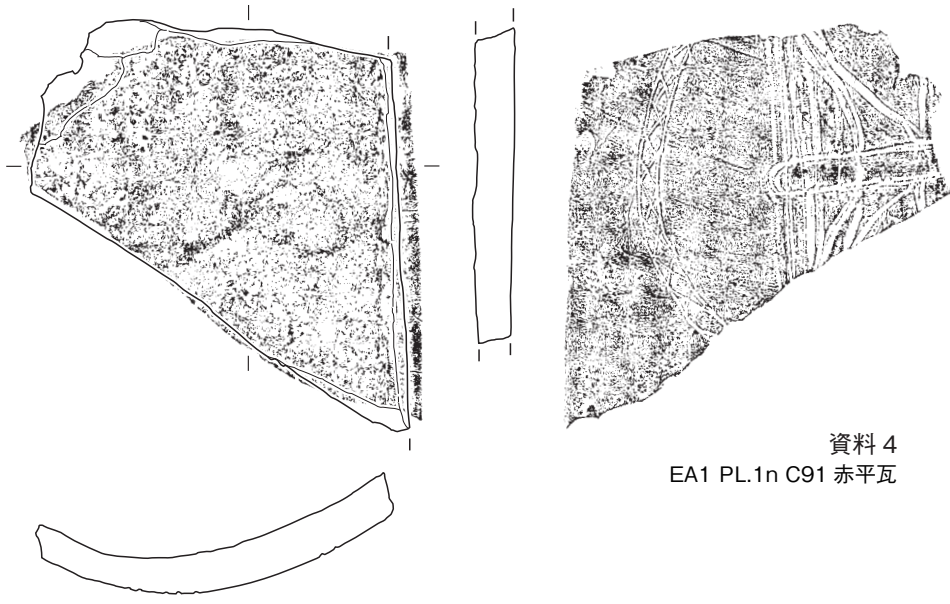


資料6〔Ⅲ-a-EA1 PL.1n / C106〕

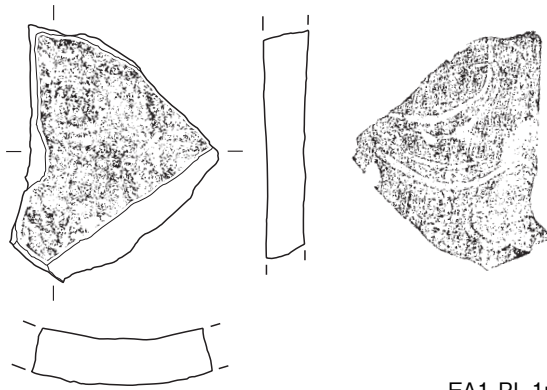


同左赤外線撮影

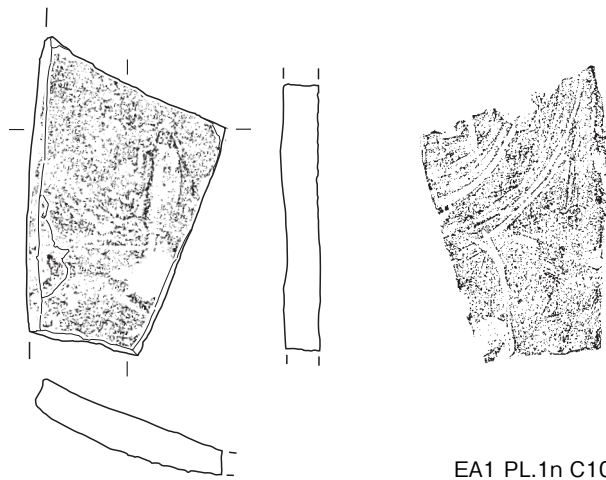
図6 資料4～6写真



資料 4
EA1 PL.1n C91 赤平瓦



資料 5
EA1 PL.1n C106 赤平瓦



資料 6
EA1 PL.1n C106 赤平瓦

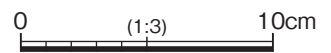


図 7 資料 4～6 実測図



図8 ペンジケント遺跡出土壁画 ハープ奏者
(タジキスタン国立古代博物館所蔵)



図9 線刻の重なり (資料4)

IV：線・円の組み合わせ模様

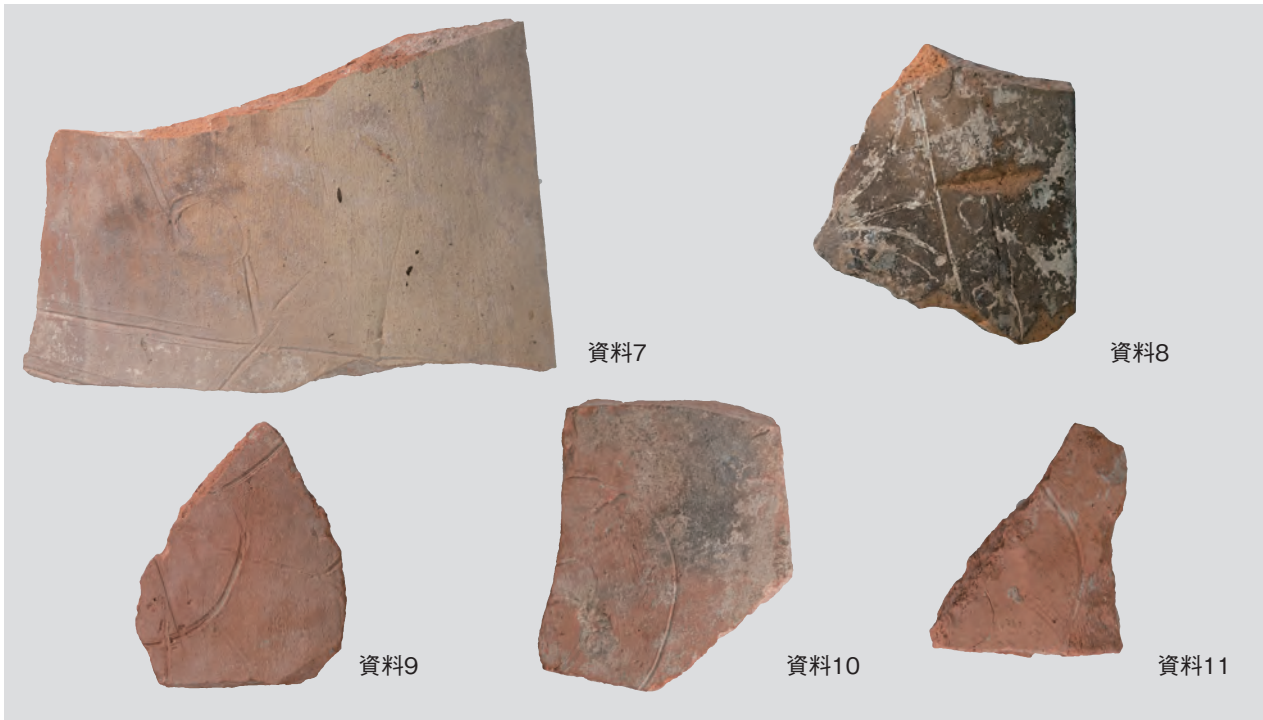
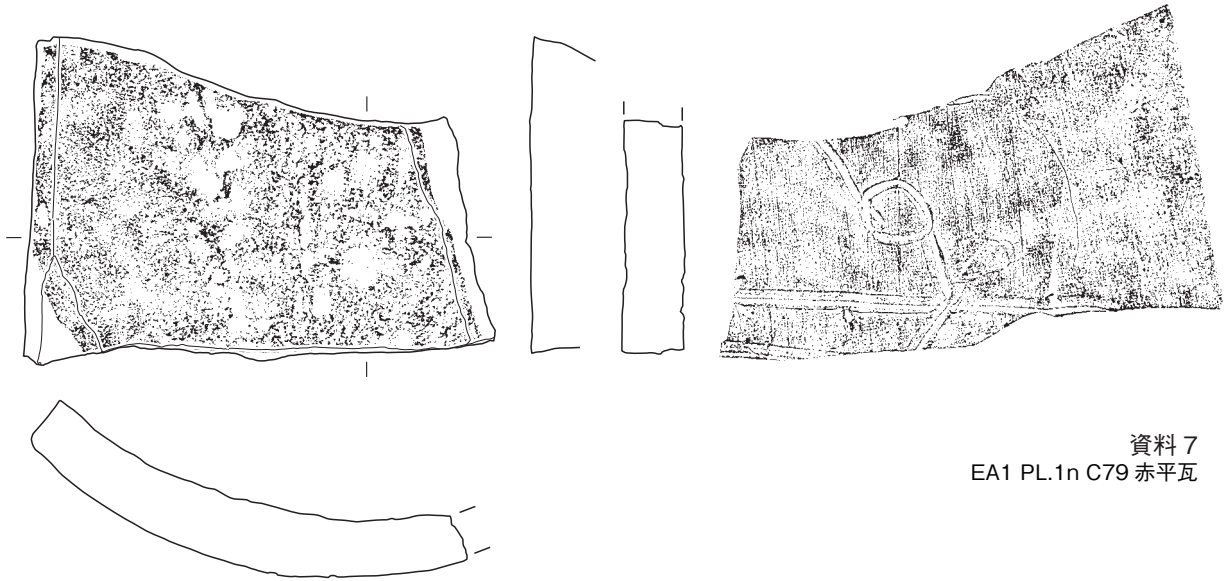
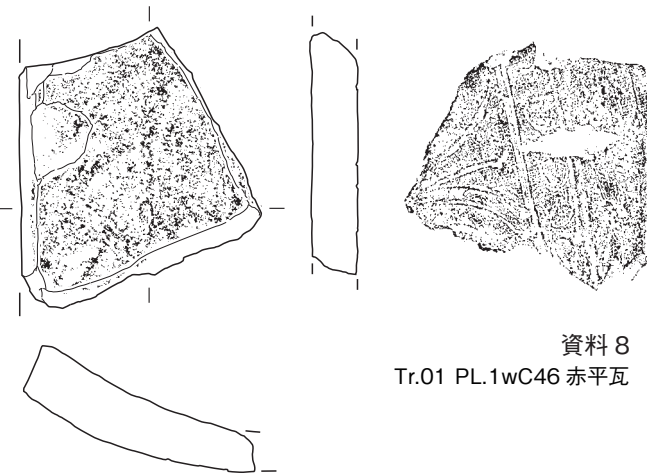


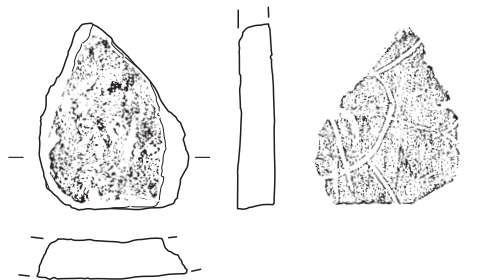
図10 資料7～11写真



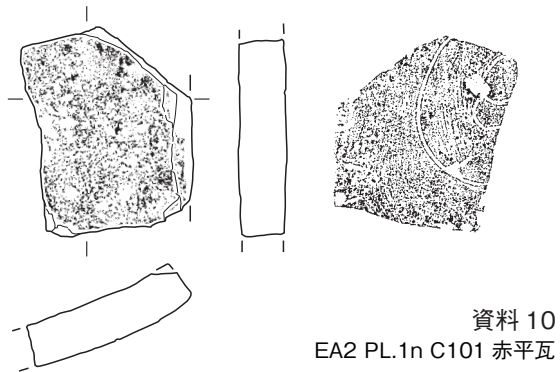
資料7
EA1 PL.1n C79 赤平瓦



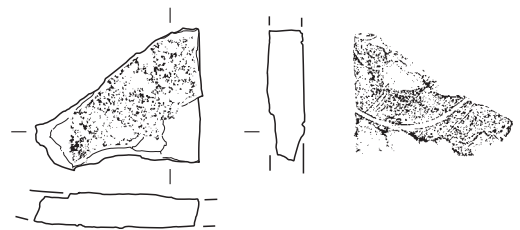
資料8
Tr.01 PL.1wC46 赤平瓦



資料9
EA2 PL.1n C109 赤平瓦



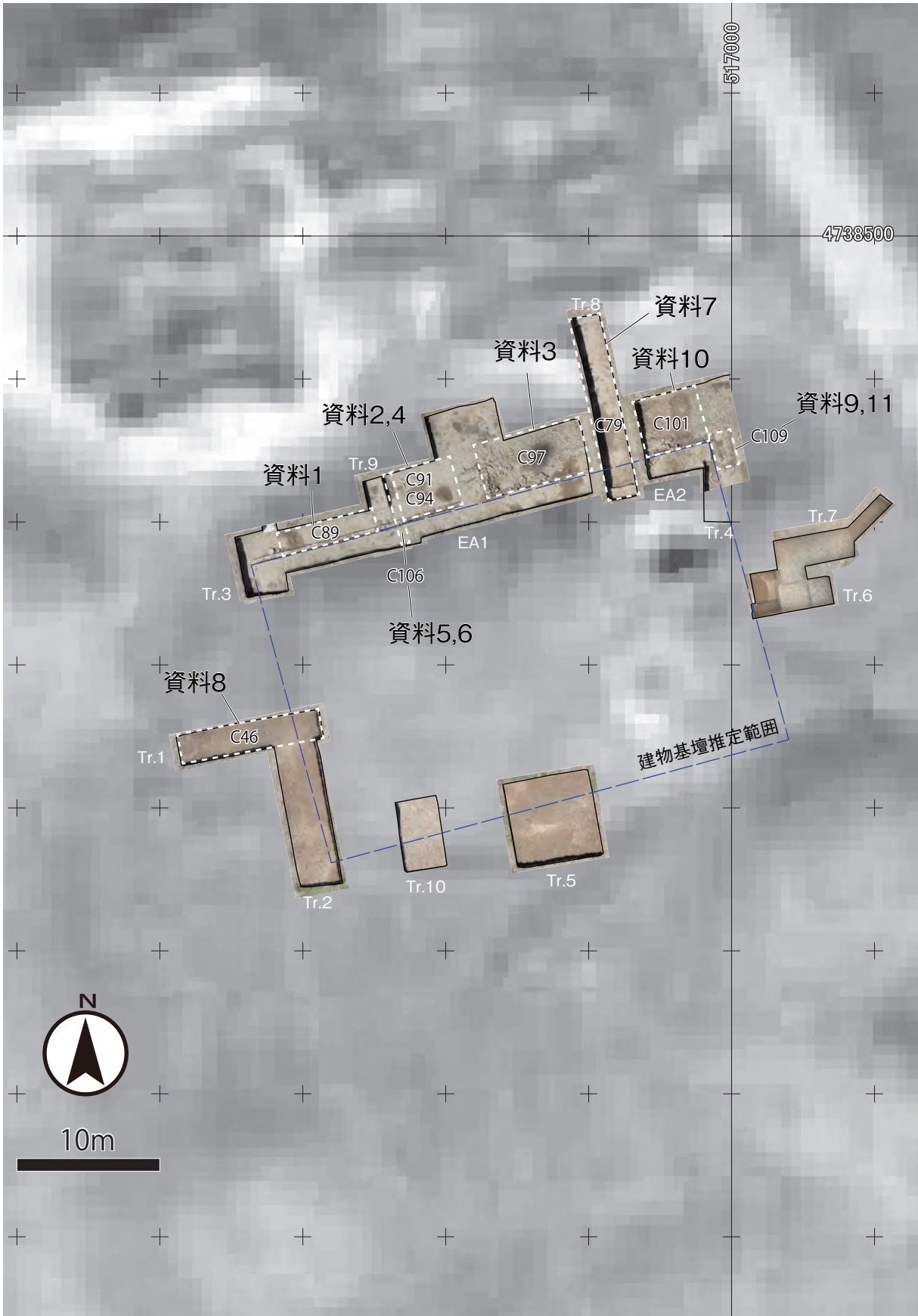
資料10
EA2 PL.1n C101 赤平瓦



資料11
EA2 PL.1n C109 赤平瓦



図11 資料7～11実測図



補図 AKB21区d (2025) 線刻画瓦の出土位置図

資料10〔IV-b-EA2 PL.1n / C101〕(図10・11)

建物基壇北辺側の北東隅付近より出土した。小片のため、モチーフの内容・方向性は不明であるが、先端が尖った道具による3条の曲線が描かれている。

資料11〔IV-b-EA2 PL.1n / C109〕(図10・11)

建物基壇東辺側の北東隅付近より出土した。資料10と同様に、小片のためモチーフの内容・方向性は不明であるが、先端が尖った道具による3条の曲線が描かれている。

3. まとめ

発見された線刻画瓦はすべて赤瓦であり、ヘラナデ調整された凸面に描かれていた。これらはアク・ベシム遺跡の瓦分類における「平2類」にあたる³⁾。平2類は1枚作りで製作され、年代的には9～11世紀に比定される。興味深いのは、これらの線刻が屋根に葺く際、視認できない「裏側」になる点である。このことから、これらは建物自体に関連する装飾などではなく、製作過程における「落書き」の意味合いが強かったと推察される。

また、赤瓦の製作時期は唐の撤退後とされることから、焼成前に描かれた線刻画は当時の工人や仏寺関係者によるものと考えられる。さらにその描写に唐代の画風が残っていたことは、現地に唐代の文化的要素が根付いていた可能性を示す重要な知見となった。

おわりに

本調査により、大雲寺の存続時期を検討する上で重要な資料が得られた。今後の調査においても、精緻な発掘を通じて大雲寺の創建から廃絶に至る変遷を明らかにしていきたい。

なお本研究は、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(S)「シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷－農耕都市空間と遊牧民世界の共存－」(代表：山内和也、課題番号21H04984)の成果の一部である。

謝辞

本稿で掲載した線刻画の想像復元図については、山田華世氏に図化していただきました。また出土瓦の分類については榎原功一氏よりご教示をいただきました。心より感謝申し上げます。

註

- 1) 掲載した実測図のとおり、通常の平瓦の形状を想定して長辺方向を縦位、短辺方向を横位とした。掲載した実測図を参照されたい。
- 2) 出土位置は、調査区名〔EA1・2, Tr.1〕、1号建物基壇・北辺、西辺、東辺〔PL. 1 n・w・e〕と示す。
- 3) 榎原功一2025 「報告 碎葉鎮城と大雲寺の瓦」『帝京大学文化財研究所研究報告第23集』pp. 213-228。

Title On the Incised Roof Tiles Excavated from Sector AKB-21 of the Ak-Beshim Site:

From the Spring 2025 Survey by the Teikyo University Institute of Cultural Properties

Hidekazu Mochizuki^{*}, Kazuya Yamauchi^{*}

^{*} Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

Abstract

During the excavation of the Dayun Temple ruins at the Ak-Beshim, roof tiles featuring incised drawings were unearthed. The Dayun Temples were a network of temples established nationwide by Empress Wu Zetian with the aim of stabilizing state affairs through Buddhism. It is presumed that all the tiles bearing these incised drawings were manufactured after the Tang Dynasty had withdrawn from the region. However, some of the drawings retain the Tang artistic style, providing valuable insight indicating that Tang cultural elements had taken root in the locale.

Keywords : Ak-Beshim, Tang Dynasty, Incised Drawing, Artistic Style, Wu Zetian